

[資 料]

幼児の生活環境と遊びの様相に関する研究

時本久美子\*・畠山トミ\*\*・山下陽子\*\*

(平成9年5月12日受付, 平成9年7月24日受理)

A Study Concerning Aspects on Living Environment and Play of Babies

Kumiko TOKIMOTO, Tomi HATAKEYAMA and Yoko YAMASHITA

This study has attempted to clarify how human environment and physical environment in babyhood had greatly influenced aspects on living experiences and plays of those children. Its result had shown that attitude of fathers and mothers involved with their children and living forms and its environment wherein those children live had had an effect on play sites, play mates, length of play time and the content of play, etc. which may become living experiences for children.

1. はじめに

近年, 子どもの体格は向上したが, 体力や運動能力は低下してきているといわれている。学校保健統計調査の結果からも体格に関しては, 早熟で大型のタイプが目立っている。昭和35年から平成2年の30年間で6歳児の身長については, 男子で5.1 cm, 女子で5.4 cm伸びている。また体重については, 男子で3.4 cm, 女子で3.6 cmの増加を示している。

一方, 文部省の「体力・運動能力調査」<sup>1)</sup>によるとこの十数年間柔軟性や持久力が低下し, 背筋力やボール投げの運動能力の低下が指摘されてきた。1995年10月の東京新聞には, 柔軟性の低下がいちじるしく, 握力や持久力も過去10年間の最低値を示すものが多かったとあり, さらに1996年10月10日の新聞(朝日)には, 子ども達の「走・投・跳」の基本運動能力のうち, 跳んだり投げたりする力が多くの年齢で過去最低を記録したことが1995年の「体力・運動能力調査」でわかったと報じられている。このことを考えると, 現代の子ども達を取り巻くさまざまな環境に問題があるのではないかと考えられる。

日本経済の急速な成長は, 医療医学の驚くべき進歩をもたらしているが, 反面全国的に自然環境が破壊され, 環境汚染はますます危機的状況となってきた。国民生活も豊かになってきたが, 生活様式は大きく変化し, 中でも子どもたちの生活は驚くほどの変貌を見せてい

る。また早期教育や塾教育の過熱化, コンピュータゲームなどによる遊びの変化によって運動不足をもたらし, 肥満, 近視, 虫歯, 脊椎異常, 不良姿勢, 骨萎縮のほか, 心臓病, 胃潰瘍, 糖尿病, 高コレステロール病などの子どもの成人病として取り上げられるようになり, 同時に情緒不安定や, 精神神経障害も認められるようになってきたといわれている。

このように, 遊びの環境や空間・時間の減少などによって, 幼児みずからの新しい発見や創造の機会を失わせたり, 理性や知性の刺激をゆがませ, 感情や情緒の育成をはばむことに大きな影響を及ぼしていると考えられる。特に幼児の身体発育や機能の発達に大きな影響を与えているのは, 子どもの生活環境そのものである。具体的には, 物的環境としての住宅形態, 居住環境, 遊ぶ場所などが挙げられ, 人的環境<sup>2)</sup>として家族構成, 両親の遊びに対する意識, 子どもとの関わり方, 子どもの仲間関係など<sup>3)</sup>が挙げられる。その子ども達を取り巻く環境の中でも, 遊びの内容や時間, 遊び場の問題は, 今までにも取り上げられてきた。そこで子どもを取り巻く環境として毎日関わっている家族や友達など人的環境について取り上げ, 子どもたちの心や活動に直接的に影響を与えている人たちがどのように関わっているかについて考える。

以上のようなことから本研究では, 子どもの生活や遊びの実態を知り, 幼児期の子どもの生活環境と遊びについて検討し, 親と子どもの関わりやその生活環境の改善

\* 日本体育大学女子短期大学, \*\* 日本女子大学

表1 調査対象の概要と回収率

	3～4 歳			4～5 歳			5～6 歳			回答合計	回収率
	男児	女児	小計	男児	女児	小計	男児	女児	小計		
A 幼稚園	29	25	54	30	55	85	25	52	77	216	87.1% N=248
B 幼稚園	26	10	36	17	12	29	26	39	65	130	47.6% N=273
C 保育園	9	12	21	18	23	41	28	19	47	109	94.8% N=115
合 計	65	47	111	65	90	155	79	110	189	455	71.5% N=636

A 幼稚園…平成7年7月調査

B 幼稚園…平成7年9月調査

C 保育園…平成7年6月調査

すべき点を、川原・畠山・山下らの「児童の体格および運動機能の発育・発達ならびに日常の活動性に関する縦断的研究」<sup>4,5)</sup>の遊びの活動性についての部分を参考にしながら、明らかにすることを目的とした。

## 2. 研究方法

### (1) 調査対象

調査対象は、都内の私立幼稚園2園と、都下の私立保育園の園児の父母636名であった。

### (2) 調査方法

調査方法は、質問紙を作成し、園から父母に手渡して記入してもらった。

### (3) 調査の内容

調査票の内容は、「基礎調査」、「子どもの生活環境」、「親と子どもの関わり」、「両親の運動歴」など4項目について33の設問を行った。

### (4) 調査期間

調査期間は、1995年6月から9月であった。

### (5) 回収率

回収率は、A 幼稚園が87.1%、B 幼稚園が47.6%、C 保育園が94.8%であり、全体では71.5%であった。

## 3. 結果と考察

### (1) 調査対象の概要

調査対象の3園は、東京都内私立幼稚園2園と都下の保育園1園である。幼稚園の2園は、それぞれに保育園環境や生活環境に特徴があることから、子どもの遊びの様相に違いが見られると考えられた。また、幼稚園と保育園の目的や生活環境にはっきりと違いのある保育園に通う

子どもの遊びの様相についても検討するために、都下の保育園についても調査を依頼した。対象の子どもの「園別」・「性別」・「年齢別」について表1に示した。

### (2) 子どもの生活環境

#### ①居住環境

子どもが生活する「住居」の環境について3園を比較すると、A 幼稚園・C 保育園の男女児とも、どの年齢においてもほとんどが〈住宅街〉に住んでおり、B 幼稚園の男女児とも〈団地〉に住んでいる子どもが約80%あり、A 幼稚園・C 保育園と生活する環境の違いがはっきりと区別できる。A 幼稚園は都心の私立の幼稚園であり、子どもたちは交通手段を使い住宅地から通園している。またC 保育園は東京郊外の自然がまだ残る住宅街にある園である。一方B 幼稚園は東京都心から離れているが通勤に便利なベッドタウンとして大きな集合住宅が建ち並んでいる。この集合住宅に住む子どもたちは、おもに1階から3階に住んでいるという回答が多く見られた。これは1983年にすでに、建築家のA. マリー・ポロウィがのべている<sup>9)</sup>ように子どもが成長する課程で住まいを離れて空間環境や社会環境の中ですべてのものを経験し探索しようとし、その欲求はますますふくらんでいき、続いてゆく。そして子ども達は遊び友達を必要とし、一緒に遊ぶ場所を必要とするようになる。ここで遊びの問題は居の地表からの高さなどの特徴によって影響を受け、親と子どもの個性は、住宅の選択および住宅の条件への順応に深く関係するという。このことからA 幼稚園・C 保育園とB 幼稚園の居住環境の違いによって、子どもの生活や遊びには何らかの影響があると考えられる。

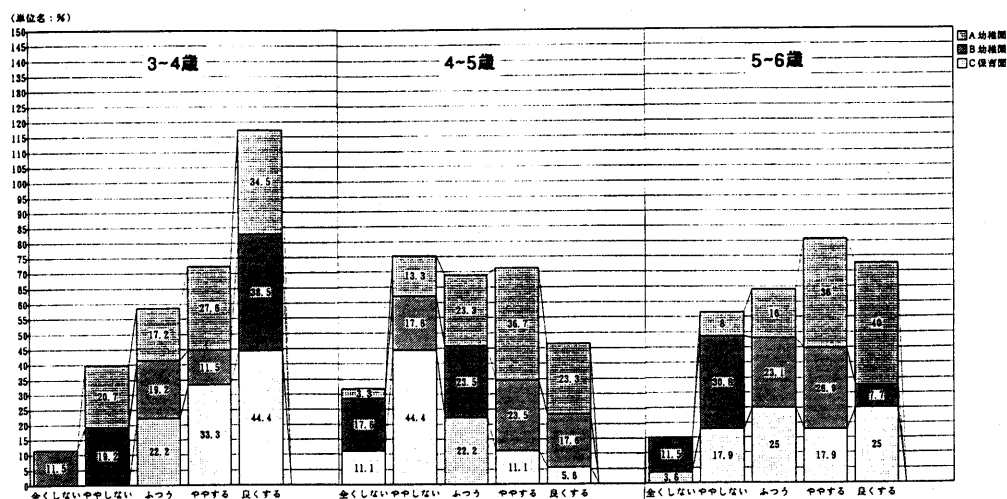


図1 父親との身体を動かす遊び (男)

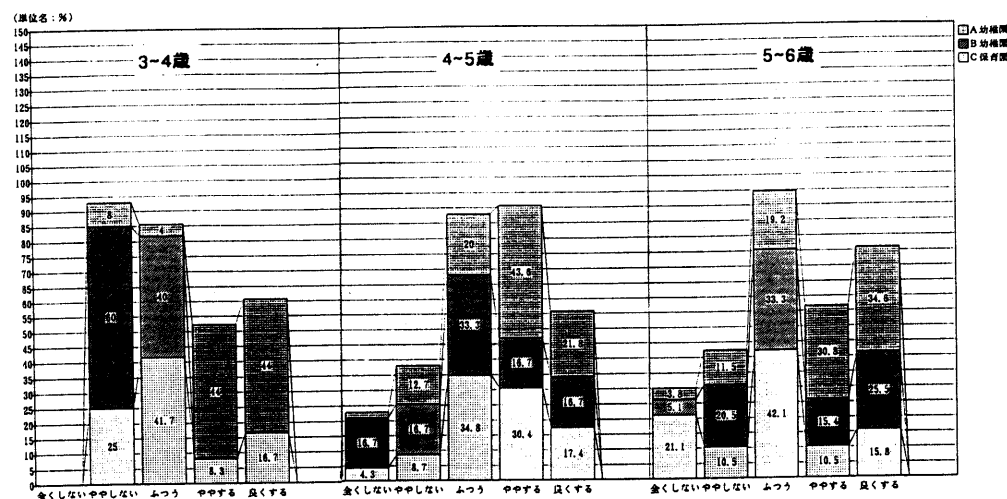


図2 父親との身体を動かす遊び (女)

## ② 家族構成

「家族構成」は、3園とも同じような家族構成であり、どの園でも男女児ともに、父母と兄弟姉妹という家族形態が多く、祖父母との同居は少ない傾向であった。「家族構成」と「住居環境」を併せて見てみると、A 幼稚園とC 保育園では住宅街の住居で祖父母との同居が20～30% 見られ日本の平均の16.7%<sup>7)</sup>より高い値を示しているが、B 幼稚園の祖父母と同居が他の2園よりやや少なく10～15% は日本の平均的な数値であり、〈集合住宅〉という住居環境のためと推察される。

## ③ 人的環境

### ア. 母親の生活様式

対象の園児の「母親の職業」は、A・Bの幼稚園では〈専業主婦〉の母親がほとんどであるが、C 保育園では当然の結果であるが〈パートタイム〉や〈全日勤務〉が多かった。この母親の職業による「母親の忙しさ」についての結果は、特に忙しくもなく、時間的なゆとりがあるのでない〈ふつう〉と感じている母親が40～55% あった。ついで多かったのは〈やや忙しい〉と感じている母親で、20～35% であった。「母親の職業」と合わせて見てみると、同じ〈専業主婦〉でもB 幼稚園の母親は〈ややゆとりがある〉、〈ゆとりがある〉という母親が3園の中では最も多くあった。

### イ. 父母の運動経験と運動への意識

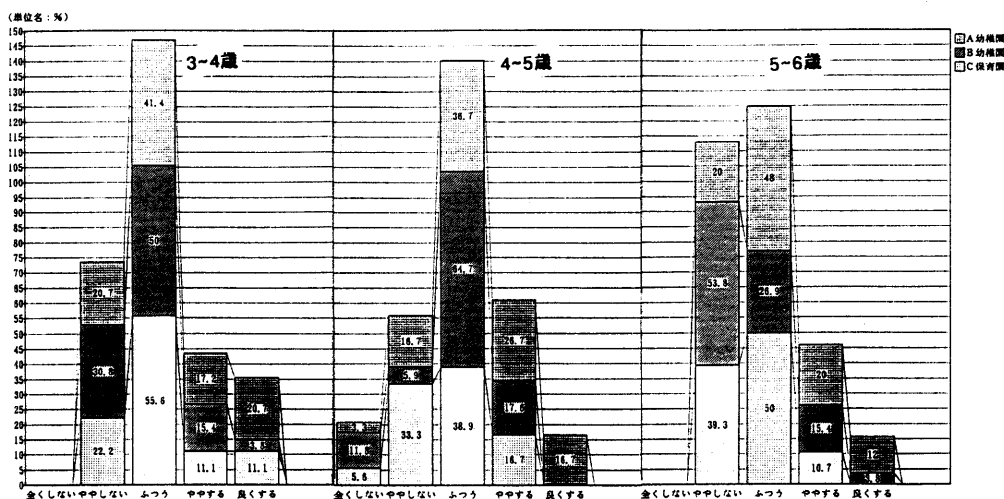


図3 母親との身体を動かす遊び(男)

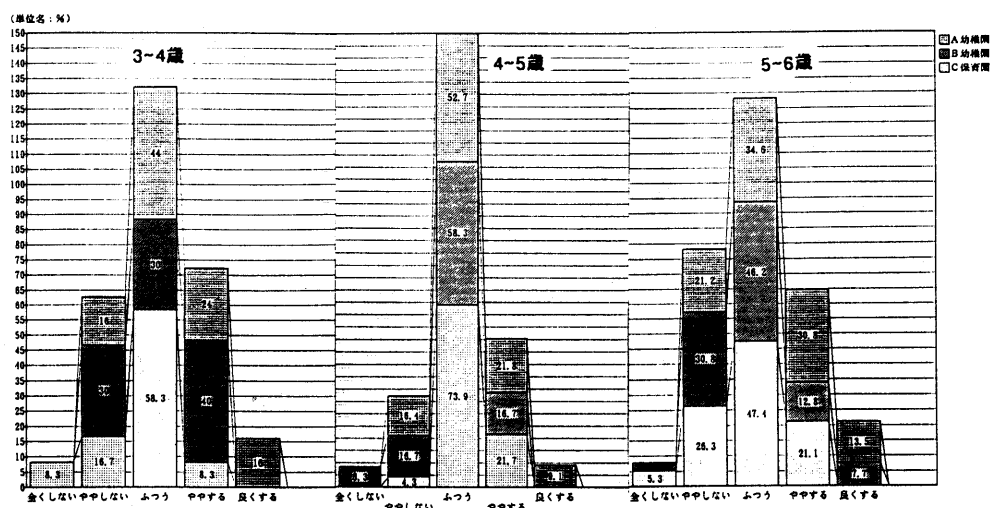


図4 母親との身体を動かす遊び(女)

子どもは、成長する過程で多くの人たちに関わって育つが、中でも最も身近で大きな影響を与えるのは父母やその他の家族であろう。親の意識の違いによって生活経験もさまざまに変わっていくと考えると、子どもの活動についても親の運動や遊びに対する意識によって影響されるといえる。そこで父母の運動経験や運動をすることが好きか、また得意かなどについてまとめた。

まず父母の「スポーツ歴」については、父親のスポーツを「<していた>」がA幼稚園・B幼稚園では80~90%と多かったが、C保育園では「<していた>」が60%前後の割合で、「<していない>」が他の2園より多く15~30%

あった。母親では3園とも「<していた>」が多いが、A・B幼稚園では60~90%、C保育園では40~60%で他の2園より少なかった。「<していない>」割合は20~40%の園が多く、父親の割合より多かった。

また、父母の「運動の好き・嫌い」については、父親はどの園でも「<運動が好き>」の回答が多く、特にA幼稚園の父親に「<運動が好き>」が60%強見られた。そして「<やや好き>」と「<ふつう>」の割合がついで多かったことから、全体的に父親は運動が好きであるといえる。また母親では、運動が「<好き>」「<やや好き>」「<ふつう>」の回答が30~40%とほぼ同じ位の割合であった。B幼稚園とC

表2 父親の運動好きと子どもとする遊び(男子)

[illegible]

表3 母親の運動好きと子どもとする遊び(男子)

[illegible]

表4 父親の運動好きと子どもとする遊び(女子)

	嫌い			やや嫌い			ふつう			やや好き			好き		
	A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	C
鉄棒・ブランコ	3.7%	0.0%	7.7%	0.0%	0.0%	15.4%	32.2%	8.3%	23.1%	9.3%	33.3%	30.8%	64.8%	58.3%	15.4%
公園・散歩	2.2%	4.5%	5.9%	1.1%	0.0%	5.9%	14.3%	18.2%	23.5%	16.5%	18.2%	17.6%	65.9%	59.1%	41.2%
縄飛び・まりつき	0.0%	0.0%	16.7%	0.0%	0.0%	16.7%	16.7%	0.0%	16.7%	14.3%	25.0%	16.7%	69.0%	75.0%	33.3%
親子体操	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	12.5%	66.7%	10.0%	0.0%	0.0%	90.0%	87.5%	33.3%
キャッチボール・マラソン	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	4.8%	0.0%	0.0%	9.5%	0.0%	100.0%	85.7%	100.0%	0.0%
自転車乗り	0.0%	5.9%	0.0%	0.0%	0.0%	12.5%	16.9%	5.9%	25.0%	16.9%	23.5%	37.5%	66.2%	64.7%	12.5%
スポーツ	0.0%	0.0%	0.0%	4.0%	0.0%	0.0%	16.0%	0.0%	33.3%	12.0%	40.0%	0.0%	68.0%	60.0%	33.3%
その他	0.0%	0.0%	33.3%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	33.3%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%	100.0%	33.3%
無回答	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%

表5 母親の運動好きと子どもとする遊び(女子)

	嫌い			やや嫌い			ふつう			やや好き			好き		
	A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	C
鉄棒・ブランコ	3.7%	0.0%	0.0%	5.6%	16.7%	23.1%	27.8%	16.7%	7.7%	20.4%	25.0%	23.1%	42.6%	41.7%	46.2%
公園・散歩	4.4%	4.5%	0.0%	7.7%	13.6%	17.6%	27.5%	27.3%	17.6%	25.3%	13.6%	17.6%	35.2%	40.9%	47.1%
縄飛び・まりつき	4.8%	25.0%	0.0%	7.1%	0.0%	0.0%	23.8%	0.0%	16.7%	26.2%	25.0%	16.7%	38.1%	50.0%	66.7%
親子体操	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	12.5%	33.3%	20.0%	25.0%	33.3%	50.0%	12.5%	33.3%	30.0%	50.0%	0.0%
キャッチボール・マラソン	4.8%	0.0%	0.0%	14.3%	0.0%	0.0%	23.8%	33.3%	0.0%	19.0%	0.0%	100.0%	38.1%	66.7%	0.0%
自転車乗り	2.6%	11.8%	0.0%	10.4%	11.8%	25.0%	24.7%	23.5%	0.0%	24.7%	11.8%	25.0%	37.7%	41.2%	50.0%
スポーツ	0.0%	20.0%	0.0%	12.0%	0.0%	33.3%	20.0%	20.0%	0.0%	16.0%	0.0%	0.0%	52.0%	60.0%	66.7%
その他	0.0%	25.0%	0.0%	9.1%	0.0%	0.0%	27.3%	0.0%	33.3%	9.1%	0.0%	33.3%	54.5%	75.0%	33.3%
無回答	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%

保育園の3～4歳児の母親は〈やや嫌い〉が20～30%で目立ったが、全体的に母親は運動が好きであるといえる。父親の積極的な〈好き〉に比べ、母親はやや消極的な〈好き〉であるといえるだろう。

次に「運動が得意か・不得意か」について、父親はA・B幼稚園では〈ふつう〉〈やや得意〉〈得意〉に多く、A幼稚園の〈得意〉という父親は男女児とも40～60%あった。C保育園では4～5歳児の男女児の父親に〈やや不得意〉が18～30%、また4～5歳児男児父親に〈不得意〉が18%と目立った。一方、母親ではA幼稚園・B幼稚園とも〈ふつう〉〈やや得意〉〈得意〉が20～40%と多かったが、B幼稚園とC保育園の男女児の母親に〈やや不得意〉〈不得意〉が10～20%あった。

#### ウ. 父母と子どもの交流

まず日頃の生活の中で、父母が子どもと身体を動かす遊びをするかについて次のようにまとめた。父親との身体を動かす遊びを図1に男児、図2に女児を示した。男児では3園とも3～4歳児の〈よくする〉が多く、各園35～45%あった。またB幼稚園の5～6歳児の男児30%、3～4歳児の女児60%、C保育園の4～5歳児の男児45%が〈ややしない〉の回答が目立った。一方母親と身体を動かす遊びについて図3に男児、図4に女児を示した。3園の男女とも〈ふつう〉という回答が多かったが、〈ややしない〉と回答したB幼稚園の3～4歳児男女児各30%、5～6歳児の男児54%と女児31%が目立って多かった。

次に、父母が運動を好むかどうかと子どもの遊びの内容に相関があるかについて、表2、表3に男児、表4、表5に女児を示した。父母ともに運動が〈やや好き〉〈好き〉な子どもの遊びは、遊びの種類も多いことがはっきりわかる。〈やや嫌い〉〈嫌い〉という父母の子どもの遊びは、〈固定遊具〉や〈公園・散歩〉などで親が子どもの相手をしないで遊んでいる傾向が推察できる。母は運動〈嫌い〉であっても、〈キャッチボール・マラソン〉〈縄跳び・まりつき〉など4%強の女児が少数あった。

#### (3) 子どもの遊戯環境

##### ① 子どもの遊びの実態

##### ア. 遊びの実態

ここでは子どもが日頃からどのような場所で遊んでいるかみてみると、遊ぶ場所が屋内か屋外かについては、3園とも〈同じくらい〉と回答している人が40～60%と多く、ついでA・B幼稚園では〈やや屋内〉が多かったが、C保育園では〈やや屋外〉と〈屋外〉が、3～4歳児男児では約60%あり、その他の年齢においてもたの2園より約10～15%多かった。

次に日頃子どもたちがおもに好んで遊ぶのはどこであるかについての結果は、3園の子どもの約80%以上が〈自分の家〉と〈公園〉であった。ついでA・B幼稚園の子ども達は〈友人の家〉が多かったが、C保育園では〈庭〉が40～50%と〈友人の家〉30～40%があった。これはC保育園の居住地の環境が、東京都下の緑が多く比較的空間があるといえる地域であることも影響していると推察される。この遊ぶ場所の中でも特に好んで遊ぶ機会の多い場所は、3園のそれぞれの年齢の男女児とも〈公園〉と〈自分の家〉が多く、C保育園では他の2園に結果として現れない〈庭〉が挙げられていた。1987年の川原らの研究と同じような結果であった。

次に、子どもが園から帰ってから、毎日どのような遊びをしているかについて「天気の日遊び」から見てみた。具体的な遊びは、どの園の子どもも〈三輪車や自転車、一輪車〉などの遊びが50～79%で多かった。これは1987年の川原らの研究によると、7歳位まで同じような傾向であることがわかったが、しだいに仲間と関わりながら行い、運動技能に関わる遊びへと変わっていくことになる。次に同じように多かったのが〈固定遊具〉を使つての遊びや〈運動遊び〉であった。特に3～4歳児の〈固定遊具〉遊びは60～80%あった。〈鬼ごっこ遊び〉や〈ごっこ遊び〉は少ないながら10～20%あり、遊びのひとつとして定着しているようであるが、B幼稚園では他の2園より半数以下と少なかった。また、〈自然に関わる遊び〉についても挙げられており、近所の空き地や公園で遊ぶとか、虫を採ったり、花を摘んだりなど少ない自然を何かの形で取り込んで遊んでいる様子がかがえる。しかしこの結果では、B幼稚園では〈自然に関わる遊び〉が最も少ないことが図の上からも推察される。B幼稚園の設置環境が、大きな高層団地や大きな道路に囲まれた地域であることも影響していると考えられる。C保育園では、他の2園に比べて自然遊びが多いのは、やはり地域性がはっきり現れているといえる。

天気の日遊びということで、〈室内での遊び〉は少ないことがわかる。大人にも子どもにも人気のある〈ファミコンゲーム〉は非常に少なく、ほとんどの子どもが天気の日には外で遊んでいるといえる。

「雨天の日の子どもの遊び」については、天気の日遊びとは逆に、室内での遊びがほとんどである。遊びの内容としては、〈室内遊び〉80～90%の他に〈ごっこ遊び〉〈ファミコンゲーム〉〈テレビ〉に集中していた。特にB幼稚園の男児のどの年齢においても〈ファミコンゲーム〉が60～80%と目立って多かった。この〈ファミコンゲーム〉は1987年の調査では、小学生の9歳で屋

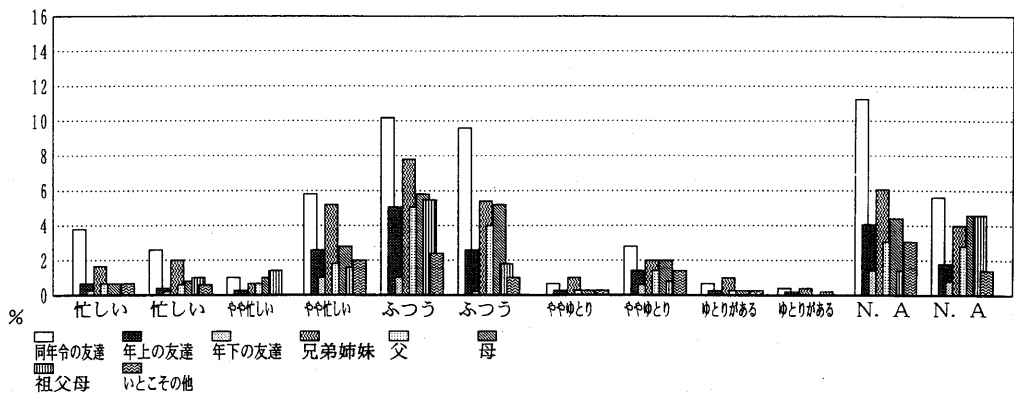


図5 母親の忙しさと遊び相手 (A 幼稚園)

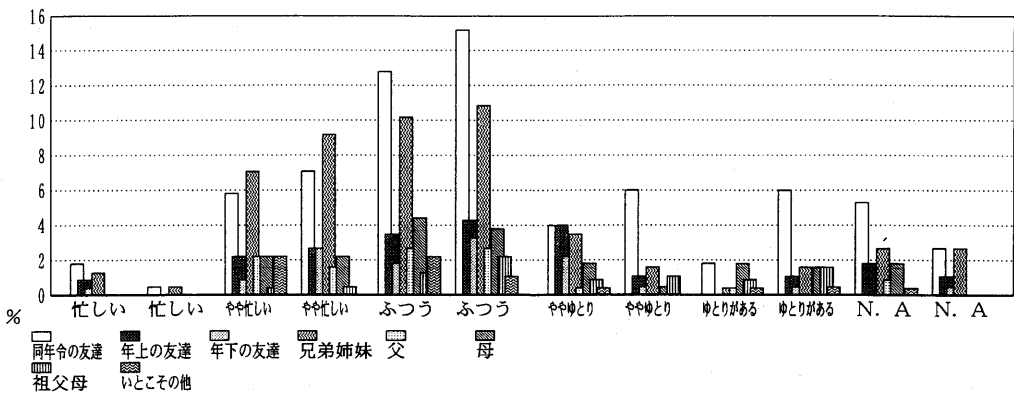


図6 母親の忙しさと遊び相手 (B 幼稚園)

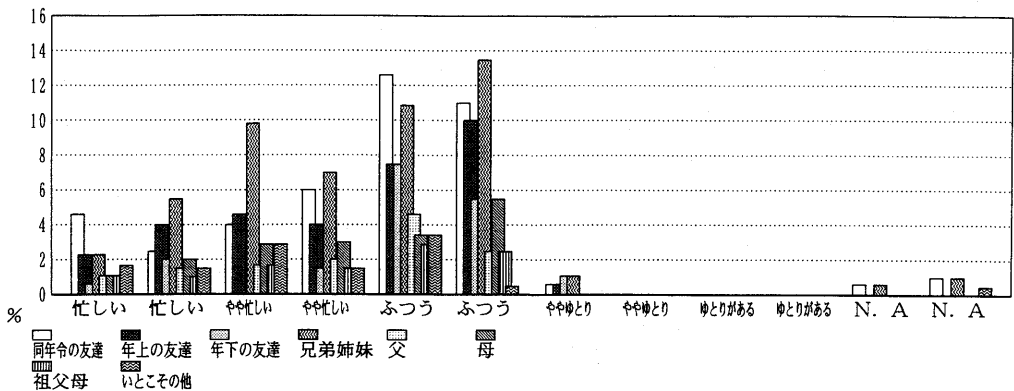


図7 母親の忙しさと遊び相手 (C 保育園)

内の遊びの最も好む遊びとして挙げられていたが、時代の移り変わりとともに低年齢化しているとも考えられる。3園とも女兒には〈ごっこ遊び〉が多く見られ50～80%あり、遊びの内容に男女差が現れていた。

#### イ. 遊び時の対人関係について

日頃子どもがおもにだれと遊んでいるかについて、子どもの生活の中での人的環境として子どもに与える影響が最も大きいのは、家族の他に遊び相手や遊びの仲間である。ここでは、どの園においても遊び相手として〈同年令の子ども〉が90%以上あり、〈兄弟姉妹〉が70%



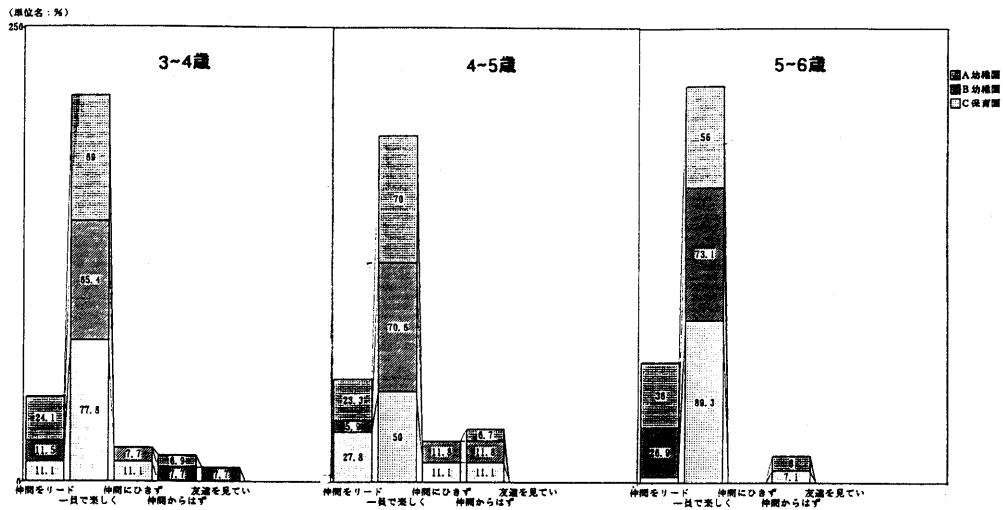


図8 遊びの様子 (男)

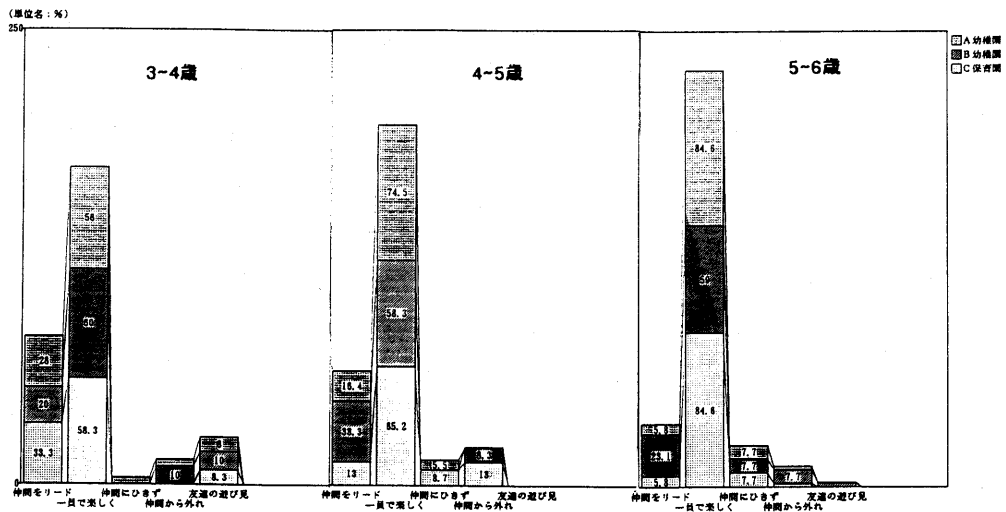


図9 遊びの様子 (女)

以上というように多かった。特にC保育園の男・女児ともに、遊び相手は〈同年令の友達〉より〈兄弟姉妹〉が多かった。遊び相手として〈年下の友達〉より〈年上の友達〉が多かった。1987年の川原らの研究でも同じような結果であったが、年齢が高くなると遊び相手が〈年上の友達〉より逆に〈年下の友達〉に変わっていくようである。

また〈父親〉や〈祖父母〉より〈母親〉と遊ぶことが多い傾向であった。これは、母親の職業から見てみると〈専業主婦〉が多かった結果と、〈パートタイム〉で仕事をしている母親が多かったことから、母親に時間的に

子どもと過ごすゆとりがあることがわかる。またA幼稚園の男女ともに、〈祖父母〉が遊び相手になっている値が目立った結果が得られた。特に3~4歳児でA幼稚園女児とC保育園男児に70~80%と目立った。また母親の忙しさによって子どもの遊び相手に相関があるかどうか図5~7に示した。どの園でも男児では、母親が時間的にゆとりはないが忙しくもないという〈ふつう〉と回答している時、子どもは同年令や兄弟姉妹と多く遊んでいるという結果であった。また〈母親〉や〈父親〉と遊んでいる子どもも少数ではあるがいることがわかる。また女児では、母親が忙しくとも時間的にゆとりがあっ

ても、遊び相手は〈同年令〉が多いことがわかる。次に多いのは〈兄弟姉妹〉であるが、少数ながら母親は忙しくて子どもの遊び相手になっていることがうかがえる。

次に子どもたちは、日頃遊ぶ時には何人ぐらいの仲間と遊んでいるかについての結果は、全体的に〈3人〉から〈2人〉が最も多く、〈4人〉から〈5人〉で遊ぶ子どもはいるものの割合は下がっている。年齢別に見ても、〈2人〉から〈3人〉が多い。園別に見てみると、2幼稚園は〈2人〉が約30%、〈3人〉が30~40%と多いが、C保育園の遊び仲間の人数は、どの人数も近似しているのがわかる。しかし全体的に子ども達の遊び仲間は、大勢より小グループでの活動が多いといえる。1987年の川原等の研究でも同じような結果であり、小学生1年生~3年生になっても遊び仲間は〈2人〉か〈3人〉が多く、〈2人〉遊びがさらに多くなっていくようである。

子どもは成長する過程の中でさまざまな経験をするにより、精神発達がなされるのであるが、物的環境や人的環境によって、自分に働きかけてくる物に対して反応し、逆に自分から働きかけていく反応を現して遊んでいる。しかしみずからの反応を受け入れてもらえない時に、まだ精神発達の未熟な子ども同志の間では「けんか」としておもてに現れる。この「けんか」については、どの園でも〈ふつう〉・〈あまりしない〉が多く、〈全くしない〉もあった。年齢から見ると、まだ仲間づくりが未熟で相手の存在や行動を受け入れることが未熟な3歳児は、〈よくする〉や〈ややする〉が目立ったのは、3歳児らしい結果である。

このように子どもの精神発達に大きく影響する「けんか」については、時にはささいなけんかは見られたが、頻繁にけんかを行うということもなく、とっくみあいのけんかに発展するようなことはめったにないという結果であった。この結果から遊んでいる様子を見ると、仲間の先頭に立ち活発で積極的な役割の立場より、仲間の一員として楽しく遊ぶタイプの子どもの方が多いことが理解できた。けんかをした時の様子については、〈勝つ〉とか〈負ける〉ということまでけんかが発展するより〈どちらでもない〉と見て取れた結果である。

## ② 子どもの様相

### ア. 遊びの様相

日頃の生活のなかで子どもが仲間とどのように関わって遊んでいるかについて、図8、図9に示した。仲間の中でどのような存在であるかについて「遊んでいる様子」から見たものであるが、どの年齢でも〈リーダーシップをとって活発に遊ぶ〉というより、〈仲間の一員と

して遊んでいる〉という様子が多く 60~90% を示した。仲間の中でも積極的に行動する〈遊び仲間の中心〉となって、仲間をリードしていく〉と回答したのは、A・B幼稚園 5~6歳児男児の30~36%、B幼稚園 4~5歳児女児33%、C保育園 4~5歳児男児と3~4歳児女児の30~33%であったが、〈仲間の一員として遊んでいる〉割合の約半数弱である。

〈仲間を引きずられてしまう〉〈仲間からはずれてしまう〉〈友達が遊んでいるのを見ている〉という消極的な子どもは大変少数であった。

また仲間の中でどのように振舞っているかという態度の面からみた「遊んでいる様子」については、どの園でも〈リーダーとなって遊びの中心になる〉というより、〈ふつう〉〈やや中心的〉が多く、図5~7に見られるように仲間と協調しながら遊んでいるという傾向であった。

父母の運動好きや運動嫌いが、子どもの日頃の遊びの様子に影響しているかについて見てみた。表6には父親の運動の好き・嫌いと男児の遊びの様子を示し、表7には女児を示した。男児ではどの園でも積極的に中心になるというより〈仲間の一員として〉遊びに参加しており、その子どもの父親は〈運動が好き〉〈やや好き〉〈ふつう〉の運動志向型がほとんどであった。また少数ではあるが〈仲間をリードして遊んでいる〉という子どもの父親も、〈運動が好き〉と〈やや好き〉が2つの幼稚園に多かった。次に女児では、3園とも〈仲間の一員として〉遊んでいるという子どもの父親は運動志向型であるといえ、特にA幼稚園の父親は〈運動が大変好き〉であることがわかる。また〈仲間をリードして遊んでいる〉子どもの父親も運動志向型であるといえる。また母親の運動に対する意識から見てみると、〈仲間をリードしながら遊ぶ〉子どもも、〈仲間の一員として楽しく遊ぶ〉子どもも、父母ともに運動が好きか、好きに近い志向型であることがわかった。

### イ. 寝つきと食欲

ここでは、生理的な現象を把握することによって子どもの生活の様相について考察することができるという観点から、「睡眠」と「食欲」についてまとめた。子どもが毎日積極的に活発に遊んでいるということは、食欲も十分あり、夜の就寝は早く、寝付きも良く、十分な睡眠がとれていることが想像できる。

「寝起き」では、B幼稚園の4~5歳児の男児を除いて〈ふつう〉〈ややよい〉〈とてもよい〉に多く、著しい年齢差・男女差は認められなかった。

また「寝付き」では〈ふつう〉〈ややよい〉〈とてもよい〉が同様な割合を示した。「寝起き」でB幼稚園の4~

表 6 父親の運動好きと遊びの様子 (男)

	嫌い			やや嫌い			ふつう			やや好き			好き		
	A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	C
仲間をリード	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	28.6%	21.7%	27.3%	28.6%	8.7%	27.3%	14.3%	69.6%	45.5%	14.3%
一員となり遊ぶ	0.0%	0.0%	2.4%	3.6%	0.0%	9.8%	20.0%	33.3%	17.7%	23.6%	27.1%	19.5%	52.7%	39.6%	4.9%
仲間にややひきずられる	0.0%	0.0%	33.3%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	25.0%	33.3%	0.0%	50.0%	0.0%	0.0%	25.0%	0.0%
仲間からはづれる	0.0%	25.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	16.7%	75.0%	50.0%	66.7%	0.0%	0.0%	16.7%	0.0%	25.0%
友達が遊ぶのを見ている	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	50.0%	0.0%	0.0%	50.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
無回答	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%

表 7 父親の運動好きと遊びの様子 (女)

	嫌い			やや嫌い			ふつう			やや好き			好き		
	A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	C
仲間をリード	5.3%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	20.0%	15.8%	20.0%	10.0%	15.8%	20.0%	20.0%	63.2%	60.0%	50.0%
一員となり遊ぶ	0.0%	5.6%	5.4%	2.0%	5.6%	8.1%	18.2%	22.2%	32.4%	15.2%	30.6%	21.6%	64.6%	36.1%	27.0%
仲間にややひきずられる	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	25.0%	33.3%	66.7%	25.0%	66.7%	0.0%	50.0%	0.0%	33.3%
仲間からはづれる	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	16.7%	40.0%	0.0%	50.0%	0.0%	66.7%	50.0%	60.0%	33.3%
友達が遊ぶのを見ている	50.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	50.0%	0.0%	50.0%	50.0%	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%
無回答	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%

5歳児の男児に〈ややよくない〉が目立ったが、同様に「寝付き」でも〈ややよくない〉が多いことから、十分な睡眠が確保されていないといえる。

「食欲」では、〈ふつう〉〈ややある〉〈とてもある〉と答えているものが多く、3園とも食欲があるといえるが、B幼稚園の3〜4歳児の男児に〈ややない〉が多かった。

「好き嫌い」については、A幼稚園・C保育園ではそれぞれに平均的な割合を示したが、B幼稚園の5〜6歳児の男児の〈ややある〉や、4〜5歳児の女児の〈とてもある〉が目立って多かった。

#### ウ. スポーツ体験

子どもが降園後の時間を利用して何か「特別に行っているスポーツ」について、A幼稚園B幼稚園とも半数以上の子どもが〈している〉であったが、C保育園では〈していない〉が多かった。C保育園の3歳児の男女児ともに全員〈していない〉で、4〜5歳児では男女児ともに約90%、5〜6歳児では男児約65%、女児約83%と年齢が高くなるに従って減少し、〈している〉が増えている。保育園に通う子どもの生活時間から考えて、降園後に課外教室や習い事をする時間的余裕を確保することがむずかしいと思われる。また年齢別に見てみると、どの園でも5〜6歳児の年齢に多く、A幼稚園では約60〜80%、B幼稚園では約55〜75%の子どもが〈している〉という回答であった。次いで4〜5歳児、3〜4歳児と少なくなっていることから、ある程度の体力や精神的な発達が考慮されてスポーツに取り組んでいるようである。全体的に見て、A幼稚園の3歳児を除くスポーツを〈している〉人は、〈していない〉人より多いが、B幼稚園・C保育園ではB幼稚園の5〜6歳児の男児を除いて〈している〉人より〈していない〉人の方が多いことがわかる。これはA幼稚園の父母には、積極的にスポーツを行わせたいという考えがあると推察される。

次に、この特別に行っているスポーツの内容としてはどの園でも最も多かったのは、〈水泳〉であった。次に多かったのは〈体操〉であったが、「体育教室」や「体操教室」などいろいろな運動を行う教室である。C保育園の男児・女児とも剣道や合気道などの〈武道〉がわずかであったが挙げられた。

この〈スポーツをする〉頻度については、どの園の男女とも1週間に1回通うという回答が目立って多かったが、ついで週に2回という回答も多かった。

#### (4) 生活環境と遊びとの関係と改善点

##### ①居住環境と遊びの環境

子どもの生活する居住環境では、A幼稚園とC保育園

の住宅街と、B幼稚園の団地という異なった居住環境の結果から遊びの相手や内容に多少の違いが見られた。居住環境を変えることはむずかしいが、居住環境を積極的に遊びの中に取り込み、遊びの空間を工夫していくことが大切である。高層の集合住宅では、外へ出て遊ぶことに時間を有するとか、親の目が届かないなどがその機会を逃してしまい、家の中で遊ぶことになってしまいがちなどが問題である。前述のA.マリー・ポロウィ<sup>9)</sup>によるとイギリスの社会学調査研究所が行った調査では、高層住宅に住んでいる5歳以下の子どもたちが戸外で遊んでいる情景はほとんど見る事ができないし、その面接調査の対象となった母親のほとんどは庭付きの住宅に移りたいという結果を報告している。今回の調査では、子どものために今後どういう住宅に住みたいかは調査していないが、子どもを健康で安全に育てたいという親の願いは万国共通の意識であると考えられる。できるだけ子どもの運動欲求を発散できる機会を親がつくり、高層住宅の階段を安全に使う工夫などに心がけることが大切である。

##### ②親と遊び時の対人関係

親の意識が子どもの生活や遊びの様相にかなり大きな影響を与えることが示唆されたが、運動好きな父母の子どもであっても、仲間の一員としての役割で活動し、必ずしも子どもがリーダー的な存在ではないことも見られた。しかしここでは、精神的な自立がまだ未熟な幼児期の子どもにとっては、父母の活動や言動が子どもの活動のきっかけになっていき、親に依存していることから、今後親の子どもへ接する態度は重要な意味があると考えられる。確かに仲間づくりを大切に、協調性をもって遊ぶことはこれからの社会生活を営む上で大切なことではある。しかし、この幼児期においては、自己表現することによって、感性を豊に育むことであり、他の友達ともぶつかりあうようなけんかも経験しながら、多くのことを学習していくことが大切である。リーダー的な役割を担うことで積極的な人との関わりや、遊びの楽しさを理解し、心身の発育発達をより充実したものにできると考える。しかし1989年の川原らの研究でも、精神的な発達が進むことによって多くの経験を積み重ねた上で、遊びの場面において〈リーダーシップ〉を発揮するようになる結論づけていた。

今回の調査をさらに深める必要があり、興味深い結果であった。

##### ③遊び環境の改善点

子どもの生活環境を知ることにより、子どもの心身ともに健康な成長を促進するために、日頃の活動的な遊び

や運動が大切であることがわかる。また、子どもが積極的に活動できるような環境を整えることは、家族とりわけ親や兄弟姉妹の遊びや運動に対する意識が、子どもの活動的な生活や遊びに影響していると考えられる。小川氏は<sup>8)</sup>、保育の実践や生活の中では「環境」を工夫するという視点が重要であり、それなしには保育の営みや子どもの生活を考えることはできないと述べている。遊ぶ場・遊ぶ相手・遊ぶ内容が、子どもの遊びをつくり変えていくことになるので、親や保育者の工夫した援助が大切である。

(本研究成果の一部は、水野スポーツ振興財団の研究助成金によるものである。)

#### 参考文献

- 1) 文部省：「体力・運動能力調査」1996年。
- 2) 安部富士男，村上春夫，時本久美子他：「保育を楽しむ」，文化書房博文社，1995年。
- 3) 萩原元昭他：「幼児の近所遊びに関する基礎調査」多賀出版株式会社，1990年。
- 4) 川原ゆり，畠山トミ，山下陽子他：「日本女子大学児童教育研究所紀要」(第8号)1987年。
- 5) 川原ゆり，畠山トミ，山下陽子他：「日本女子大学児童教育研究所紀要」(第9号)1989年。
- 6) アンネ＝マリー・ポロウィ：「子どものための生活空間」鹿島出版会，1983年。
- 7) 総務庁：「子どもと家族に関する国際比較調査」1996年。
- 8) 小川博久：「保育研究」(通巻55号)，建帛社，1993年。